

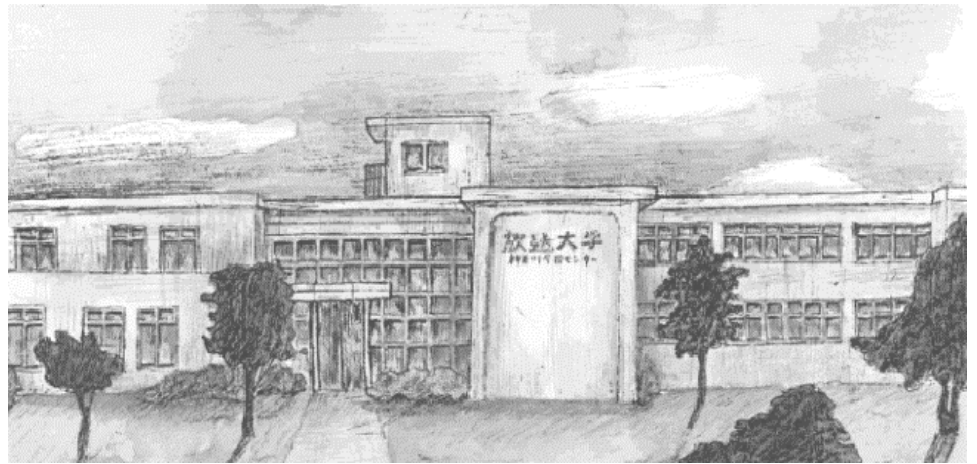
# UA 神奈川学習センター

1998年7月1日  
第1巻第2号(通巻3号)

## なつだより

### ハイライト

- 1 ゲーテの言葉
- 2 私の学習法
- 5 日常の冒険
- 6 面接授業の紹介
- 7 学生団体・サークルの活動



幸いにして人間というものは、ある程度の不幸しか理解することができない。その程度をこえた不幸はかれをほろぼすか、あるいはかれの関心をよばないかである。恐怖と希望がひとつになって、たがいに消し合って、漠然とした無感覚におちいってしまう、そういう心境があるものだ。それでなかったら、どうしてわれわれは、遠く離れたなつかしい人たちが、たえず危険にさらされていると知りながら、なおかつ毎日の平凡な生活を、いつもこんなふうが続けていくことができるのだろう。

ゲーテ『親和力』

放送大学神奈川学習センター  
〒232-0061 横浜市南区大岡2-31-1  
TEL: 045-710-1910  
FAX: 045-710-1914

# 特集:私の学習法

## 花咲き実となれ!

皆川 昭三

私が学習にかき立てられるのは、意欲というよりは貪欲という類の欲望のせいかもしれない。それでも、自分の力を信じることができないような状態に何度か陥り、そこには哀れな足跡だけが残されてきたようにも思える。

学習自体は楽しいので、自分の組んだスケジュールを確実に消化している。学習法に誤りがないかと、一つ一つ丹念に、プッシュとレビューを繰り返す。カラーペンで下字が隠れるほどに、教材を復習するのは心地よい。教材の余白も、そのまま白く残すことはめったにない。入学当初には、ノートを次々と買い求め、ひたすら整然と書きつらねていた。けれども、あとでノートに目を通すことは、ほとんど一度くらいしかなかった。二度三度と読み返すのは、やはり教材であった。そのとき記憶を呼び戻すのが、教材に書き込んだメモである。自分なりに分かり易く記したポイントを要約しておくのが有効であった。ここで、覚え込むために付けておいた略号が役に立った。

さらに、あちこちに散在する人名や、主張の特徴は一覧表にまとめる。頭を整理するためには、自分で問題を作成し、未熟ながらも問題集を練っていく。それが、最後には何枚も重なっていく。いつも、数科目分を一冊のファイルにまとめている。自製のファイルもすでに三冊目になる。現在では、とても愛着を感じている。贈答や土産の化粧箱をつぶし、張り合わせて作ったもので、たいへん重宝している。単位認定試験が迫るころ、この自分で作った問題集と教材を学習センターの図書室に持ち込み、じっくり取り組むのが、私の学習法であり、これが最善の策だと考えている。同じところを何度も何度も、それこそ貪欲にリピートする。すると思ってもみなかったところで、「あれ、こんなのを抜かしていた」と気づくことも屢々である。

ややもすると、この貪欲の弛むときがある。頭を休ませることは良いことだが、他方この時間の濫費の報いは、忽ち期末テストで結果が出てしまう。このことは分かっている、積極的に補強する学習への貪欲さがそのときは欠けてしまっているのだ。自分の能力の限界ではないか、と時には思いながら、再試験に挑む。けれども、さらにその再試験をも落としてしまった辛酸を幾度か舐めてきた。このようななかでも、仲間励まされ、おだてられて、ようやく続いて8年になる。年を重ねても、每学期自分に何の恥じらいも無いのがせめてもの救いである。中国の諺に曰く、

「ゆっくりでもよい。でも立ち止まってはいけない。」

この言葉の通り、いつのまにか私の頭の本棚にも、すこしずつでも学習の成果がぎっしり詰まり、今学期も喜びの日を迎えようとしている。「人に勝つより、自分に勝つ」という諺に従えば、自分に負けていることになる。けれどもなぜか、特別に苦しい訳でもない。不自然に、耐えている訳でもない。もしここで、手当たり次第に、新しいものに挑み、貪り、吸収したいという自分自身の貪欲さに負けているのであれば、それはそれで良しとしたい。

## 私の大学利用法

私の放送大学での学習も、この4月から二年目に入りました。短大を卒業後、4年間のOL生活を経て、エアロビクス・インストラクターになった私は、派遣社員という二足のわらじでの二重生活で、朝から晩まで走り回っていました。そんな6年間の生活に、昨春ペリオドを打ち、放送大学へ入学しました。現在、エアロビクス指導を続けながらの、また異なる二重生活を過ごしています。

周囲の人は、「今さらなにを勉強するの」「勉強が好きなんだ」などさまざまなお話を言いますが、自分の事なので自信を持って言わせていただくならば、私は決して勉強は好きではありません。その証拠に、10年前と変わらず、今でも試験前のドタバタ振りには変わらないし、自慢にはなりません、興味の向かない事についての知識は常識レベル以下なのです。このことは、先日の心理学実験実習の授業でも、「好き

な事しかやらない幸せ者」という結果が出て、証明されてしまいました。「やっぱりな」とあらためて感心してしまふありさまでした。

そんな私は、現在心理学を中心に勉強しています。職業柄、身体の健康に関わっていくうちに、心の健康の大切さを強く感じたためです。今となっては誰も信じてくれませんが、私には学生のころ、人目ばかり気になり、心配事や緊張感ですぐ腹痛をおこすような精神的にとて弱いところがありました。今でも根本的には変わっていないとは思いますが、そういったストレスをうまく発散できる方法を身につけてきてからは、生きることが随分楽になりました。

私のように、運動を行うこともその一つの方法でしょう。適度な運動の継続はストレスを減らし、心身ともに強く健康にしてくれます。また、自分なりのエネルギーを蓄える場をつくることも、ストレス解消には大切です。今の自分には、この大学がその場になっています。授業で新しい発見をすることはたいへん楽しい経験です。授業のなかでカウンセリングされてしまうような、感動した講義にも出会いました。そして何よりも、あらかじめ決められたルールの上を走るのと違う、目的を持って学習する人たちに会うことは、とても勇気づけられ、自分のエネルギーの源泉になっております。

今では、このように自己セラピーの場ともなっているこの大学で、これからも知識やエネルギーを得て、自分の生活や仕事に生かしていけるように、残りの学生生活を楽しみたいと思います。この文を読んで、「最近運動不足だな」という方、汗をかくのは本当に気持ちの良い事です。ぜひ、少しずつでも自分にあったペースでやってみてください。もし私でよろしければ、老若男女にかかわらず初級から御指導させていただきます。それでは、皆さんも充実した大学生活を・・・。

## 朱鷺研究と出会い

後藤 袈裟登

放送大学に入学して3年目の二学期、単位認定試験のための勉強中のことでした。香月初代学長が神奈川学習センターを訪問され、私をはじめ、そこに居合わせた学生諸氏に向かって、つぎのような言葉を述べられました。「本

学は一般の大学とは少し異なり、年齢も高く、多くの人生経験を豊富にもっている学生が多い。皆さん一人一人、あなた方だけにしか出来ない研究テーマを選んでください」と。

この言葉を受け、私なりに研究テーマを選び、自然の理解専攻の平本幸雄先生に指導を願い出ました。題して、「朱鷺保護と生息の変遷」という研究を行うことになりました。朱鷺は、特別天然記念物に指定されていますが、日本では絶滅寸前にあります。現在では、新潟県佐渡島の新潟県トキ保護センターに、人工飼育中の一羽のみとなっています。このままでは、地球上から消えてしまい、二度と美しい姿を見ることが出来なくなります。国際保護鳥の指定をうけており、日本だけでなく、国際レベルで守る必要のある鳥です。

トキはドイツ人シーボルトが日本に滞在中(1823-30)に捕獲し、オランダの鳥類学者テミンクによって、学名 *nipponia nippon* と名付けられた、一属一種の珍しい鳥であります。1981年には、中国で野生トキが発見されました。7羽見つけられ、そのなかには幼鳥も含まれていました。日本の協力もあって、保護がはかられ、1996年には野生と人工飼育合わせて、生息数は84羽に達することが出来ました。

卒業研究は会社勤めをしながらの研究であり、実験・観察が出来ないので、文献中心の研究となりました。トキを初めて深く知ったのは、1978年佐渡島観光の折に購入した、佐藤春雄先生の「はばたけ朱鷺」であり、私のトキ研究の原点でありました。研究のために資料を求めましたが、トキについての文献は少なく、専門書は公的機関にしかありませんでした。環境庁の自然保護局野生生物課に幾度となく通い、板橋正文氏の協力を得ました。上野動物園の資料室では、当時飼育課長でありました田代和治氏の世話にもなりました。そして、1991年には、卒業研究は大学に受理され、1995年には大学を卒業することになりました。卒業後は研究生となり、再び平本先生にお願いして、早稲田大学の石居進先生、菊地元史先生の指導を受けました。1996年に「鳥類の体色について」、1997年には「トキの羽色変化について」などの論文を完成することができました。

このほかに、多くの人びとに接することができました。新潟県トキ保護センターでのトキ見学、山階鳥類研究所での資料研究でも、それぞれ関係する方々に会うことができ、教えを受け、知識の向上を計ることができました。1986年には、第一回中国トキ保護観察団員として、はじめて海外にいき、陝

西省洋県で野生と人工飼育のトキ観察を行うことが出来ました。このときにも多くの方々との出会いがありました。今後も、朱鷺研究を進めながら、人との新たな出会いを待ちたいと思います。このような出会いを大切に、私の勉学を進める道しるべといたしたいと考えています。

## 私の卒業研究：

### 「ネギ奮闘記」

猪俣 壽久

私の卒業研究は、群馬県下仁田の特産品であり殿様ネギと呼ばれている「下仁田ネギ」と新野菜「リーキ」とを比較し、両者は競合するか否か、を調査研究したものである。

妻の両親が下仁田出身で12月になると下仁田ネギが送られて来る。すき焼き、鍋物、雑煮にして良く食べた。

こんなことから下仁田ネギと、また、宮崎基嘉指導教員のご教授により、その形態が下仁田ネギと非常に良く似ている新野菜リーキとを取り上げた。

さて、始めに文献調査を国会図書館等で行ったが、資料は殆ど入手できなく、やはり現地調査が一番であった。

下仁田ネギの由来は明らかではないが、文化2年「ネギ200本至急送れ、運送代いくらかかってもよい」と云う趣旨の江戸の大名、旗本からのものと思われる名主宛の手紙が残されており当時既に栽培され珍重されていた。

播種は9月下旬から10月上旬にかけて行い、翌年11月下旬から12月にかけて収穫する。生育期間が14～15ヶ月と長いので、下仁田には数え切れないほど通った。横浜から電車で片道約4時間、往復8時間の行程、楽しくもあり、苦しい調査であった。

リーキは別名、リーク、ポロネギ、ポアロー、洋ネギとも云われ、フランス料理には欠かせない野菜であり、ローマの暴君ネロが声をよくするために油漬けて食べたと伝えられている。

リーキの消費は、ホテル、レストランが主で輸入により賄われており、輸入先は、夏場は南半球のオーストラリア、冬場は北半球のベルギーである。

また、リーキの栽培については、埼玉県八潮市の農家会田富夫氏のリーキ畑を見学、写真も撮らせて頂き、お土産に写真用のリーキも頂戴した。

なお、これらネギの知名度調査を放送大学の6ヶ所の学習センターで実施した。下仁田ネギの知名度は、61%と高く、リーキの知名度は、6%と低かった。地域別の知名度では、下

仁田ネギでは、地元の群馬(96%)が群を抜いていたが、千葉(40%)と神奈川(33%)が低く、これは産地から遠いためか？また、東京第二(63%)の知名度が、他(除く群馬)に比べて高いのは、この地区が東京の下町であり、豊かな食生活を物語っているのだろうか？それとも、下町の見栄っ張りや、珍しがりや、なのであるだろうか？

しかし、リーキでは、知名度の地域差は殆どみられなかった。次に、食味については試食してみた。食味の相違は、端的に云うなら、下仁田ネギは日本的、リーキは西洋的である。すなわち、下仁田ネギはすき焼きなどの和風の文化、リーキはシチューなどの洋風の文化であると云える。

また、リーキが一般消費市場にあまり出回らないのは、わが国にはすぐれた日本ネギやタマネギが食べられていたからであろう。結局、下仁田ネギとリーキは競合しない、という結論を得て、卒論は終了した。

## 英国の記憶

山田 海

希望に満ちて入学した私立の高校であったが、わずか二カ月あまりでやめてしまった。その年に大検を受けて、運良く大半の科目をパスした。このとき、僕は16歳になっていた。

五月になって、ユースホステル新聞の記事で、海外語学留学という制度のあることを知った。両親に頼み込んで、9月から6カ月間英国へ行かせてもらうことになった。なにも英国でなければならぬということもなかったが、その新聞には費用が一番安いと書いてあった。それに、兄と叔母が住んでいるので、万が一何かが起こっても安心だという、スポンサーである父の意見に従った。

ともかく、ロンドン行きの飛行機に、ほとんどなにも準備せずに乗ってしまった、というのが正直なところである。モスクワ経由ロンドン行きは、一人旅の素敵な緊張感で満たされていた。12時間後ロンドンの夜景を見たときには、やけに黄色かったことを覚えている。

英語についてはそれなりの自信はあったものの、空港の税関を通るころには、ほとんど現実への対応に追われて、自信も不安も感じる余裕がなかった。人気があまりなくなった空港から、地下

鉄に乗り換えたときに、どういうわけか日本語が聞こえてきた。そこでようやく、英語の国にいることを実感した。ユースホステルに着き、すこし湿りけのある狭い二段ベッドの上段に寝た。翌朝起きて、外国に一人できて、眠ることができる自分にまず安心した。

朝食は聞いていたほど、不味くはなかった。10時過ぎ、ユースホステルを出た。その日のうちに、ブライトンにあるホームステイ先の家にならず着いていなければならなかった。地下鉄では切符を買うまで30分かかってしまった。ヴィクトリア駅では、掲示板の前で20分も眺めて、ようやく見方が分かってきた。何度も確かめて、客のすくないボロい列車にのると、しばらくして動きだした。太陽を見て、大体南に向かっていることがわかった。ブライトンはロンドンの南にある。もし間違っているとしても、近くまでは行くことはできるだろう。

じつは、英国は初めてではない。小学校6年生のときに、兄と二人で二週間あまり、叔母を訪ねたことがある。英語を使ったのは、一度YESと言ったときだけだ。高校生だった兄にすべてを任せていて、気楽なものだった。かろうじて覚えていたその時の英国の印象は、石造りの家が小さな村に並んでいて、牧場が広がっていることぐらいだった。ところが、列車が着いたブライトンの町は、レンガ造りの赤い家が視界いっぱいになり立ち並ぶ、大きな街だった。想像していたのとあまりに違ったので、思わず「でかいなあ」とつぶやいてしまった。

これが僕が感じた、最初の期待と現実のギャップだった。そしてこのあと、ヨーロッパの認識についても、ホームステイについても、そしてさらに英語学校での語学学習についても、同じ様なギャップを感じた。今考えると、これらのギャップこそがこの旅最大の収穫だった、と思う。けれども、このことは日本に帰ってくるまで、解らなかつた。

### 放送大学学生募集

平成10年度第二学期

- ・出願受付：平成10年6月15日(月) ~ 平成10年8月15日(土)
- ・授業開始：平成10年10月1日(木)
- ・資料配布：平成10年6月15日(月)
- ・興味のある方・入学を希望する方には、入学手続きや授業内容を記しました募集要項と授業科目案内を無料でお送りします。はがき又は電話で、神奈川学習センターへ請求してください。

## 面接授業「西洋音楽の歴史」を受講して

(シューベルト歌曲集『冬の旅』  
- 3枚のレコードから)

坂口英人

このシューベルトの『冬の旅』に出会ったのはもう40年位前のことになるだろうか。九州福岡県の片田舎、太宰府の都府楼に在った独身寮に住んでいた頃であった。鄙びた駅の近くの喫茶店で初めてこの曲を耳にした。暗く引き込まれるような曲と明るく清らかな曲とが混じった不思議な歌曲の魅力に取り憑かれて、何度もこの店に足を運んだ。「山小屋」という店名で、娘とその母親とがいて、店のなかには登山道具類が飾られていた。いつ入ってもお客はほとんど見あたらない寂しい田舎の喫茶店であった。

レコード・CDを合わせてもわずかに200枚余りのささやかな私のコレクションを探してみたら、3枚の『冬の旅』- フィッシャー・ディースカウ、ハンス・ポッター、ユリウス・パツァークが出てきた。ジャケットの“おやすみ”“菩提樹”“あふれる涙”“春の夢”“郵便馬車”“辻音楽師”の6曲にマークがいられた。数えてみると、これらのレコードを聴かなくなつてからもう10年以上経っている。ひどく懐かしい気がした。

放送大学の面接授業で、茂木教授の「西洋音楽の歴史」を聴講した。わずか5日間の短い授業であったが、新鮮で豊富な内容の講義に深い感銘を受けた。音楽史・音楽理論・ドイツ語への学習意欲をかき立てられた。しかし、はなはだ残念ながら、レポートの課題「楽曲分析」に応えるには私の音楽理論の知識は乏しすぎる。授業の内容を応用する力も足りない。かといつて、そのまま放置したくもない。“受講の証し”としてささやかでもよいから、現在の自分で出来る範囲のものを何か残して置きたいと考えて、印刷教材『西洋音楽の歴史』とレコード・ジャケットを手がかりにして上記の6曲の「楽曲解説」を要約して取り纏めておくこととした。

シューベルト(Franz Peter Schubert 1798-1828)がウィルヘルム・ミュラー(1794-1827)の連作詩『冬の旅』に出会ったのは、1826年末か1827年初頭であった。1828年11月、死の床に着いたシューベルトが最後まで目を通

していたのは歌曲集『冬の旅』第2部の校正刷りであった。

『冬の旅』は、前作『美しき水車小屋の娘』と同様に、ドイツの徒弟制度を背景にした歌曲集である。「親方」になれない若い職人が、遍歴先で親方の娘と恋愛に陥るが、やがて失恋し親方のもとを出奔して冬の荒野をさまよったあげく、いずこともなく姿を消す、というのが連作詩の粗筋である。

(1) おやすみ(Gute Nacht)

「私はよそ者としてこの街にやってきて、今また、よそ者としてこの街を去っていく……」の詩句で全24曲の第1曲が始まる。荒涼たる冬の野への出発を前に、主人公はかつての恋人の家の前に立って昔をしのび、その門口に記しつける“おやすみ”の一言に万感の想いを託して立ち去っていく。シューベルトの自筆楽譜には“歩行の速度で”(in gehender Bewegung)と書き込まれているが、このドイツ語の指定のもつニュアンスはいかにも曲のイメージにふさわしい。ほとんど有節歌曲といつていい歌であるが、第3節がわずかに変化する。全体は短調であるが、第4節は長調となる。前奏から後奏まで変化のないリズムが執拗につきまとい、異常な世界のはじまりを告げている。

詩の冒頭の「よそ者 fremd」という言葉は、「結局はこの街に受け入れられなかった者としてこの街を去っていく」若者の内面の深い悲しみを一言で言い表している。冬の荒野の彷徨を通じて、よそ者ということの意味を発見していく主人公の内面の旅こそが、この連作詩『冬の旅』の真の主題なのである。

(2) あふれる涙(Wasserflut)

涙とそれを溶かし込んだ雪に託してうたう一種の望郷の歌である。彼の郷愁の対象はかつての恋人の住む街であった。4節ある詩の2節ずつを1節として、2節の有節形式の歌を書いている。ゆっくりした曲で、詩の各節の終わりを繰り返す、しかも間奏をおいていることから、むしろA-B-A-Bの形といった方がわかりいい。この反復的な曲の形は、動きのない静止した印象を生み出している。ピアノ・パートのすべてのモチーフは、頬を伝い落ちる涙を思わせる前奏のなかに含まれている。

(3) 辻音楽師(Der Leiermann)

村はずれにただひとり、ライエル(ドレーライエル、英語ではハーディー・ガーディーともいう素朴な撥絃楽器の類)を鳴らしている老人がいる。その老人に不思議に心ひかれた放浪者は、どこまでもその後についていこうと心を決める。ピアノの左手が主音と

属音のオルゲルブント(オルガン点:ペダル音ともいう)を一貫して奏し続け、声を支えるのはしばしばこのむき出しの和音だけである。その最初の2小節につけられた前打音がみごとな効果をもち、それを聴くだけで身ぶるいの出るような孤独と寂寥感が伝わってくる。右手がわびしいライエルの音をひびかせ、その間を縫って乾いたメロディーが呟くように歌われてゆく。A - B - A - Bの形でおなじ旋律をくりかえした後で、クライマックスとよぶにはあまりにもつつましい歌声が、さりげなくある別の世界への出発を告げる。放浪者の感情の最後の極点 その向こうには透明な虚無だけが見すかされる、そんな極限的な世界に私たちは立たされているのである。

「不思議な老人よ、私はお前について行くことにしようか? 私の歌に、お前のライエルの調べを合わせてくれるだろうか?」の詩句で全24曲が終わる。

編集部注: 坂口さんの原稿は面接授業のレポートとして執筆されたもので「おやすみ、菩提樹、あふれる涙、春の夢、郵便馬車、辻音楽」の6曲を解説しています。けれども、残念ながら紙面の都合で一部を割愛しました。尚、原稿の全文は、インターネットのホームページ(<http://www.dango.ne.jp/ua-kanag/>)に収録してあります。

## 日常の冒険

### 迷惑電話勧誘には効力感で

松本 清康

先日、昼食時に電話があった。電話口から、いやに丁寧な風を装って、くどくどと前口上を勝手に話す声が出てきた。用件は何だと問いかけたが、それには答えず、最後にやっとワンルームマンションがあり投資に最適だと言いだした。食事中だったこともありカッとなって「そんなインチキな仕事は辞めなさい。まじめな仕事をしなさい。この馬鹿が」と言って思いっきり受話器をたたき戻した。そしたらその直後に私宛にまた電話がかかってきた。「松本です」と名乗ったら「馬鹿」と言って電話を切られ、仕返しをされた。

しかし、これ以降、この手の電話はかかってきていない。

職場のまわりの仲間を見ていると気が小さいせいで、勧誘電話を切れずにいつまでも「いいですよ。いいですよ」などとぐずぐず言っているのをよく見る。そういう者に限ってワンルームマンションだ、貴金属の投資だ、大豆、小豆だといろいろな投資の電話がかかってきている。どうせ同じ商売仲間が、いろいろな名目の投資話を仕掛けていたり、名簿回しをやったりしているので、一回でも気の弱い対応をすると他の仲間にリストが回され、餌食になるまで、電話をかけられてしまう。このような投資話を善意で紹介するような人間はいないのに、気の弱いお人好しの人間は「相手が悪意で行動している」と考えること自体、相手に悪い気がして、正常な対応ができないようだ。また、強く断ると仕返しをされると思うという者もいる。

新聞の投書欄に「勧誘電話にはウソも方便」(朝日 98.4/2)という記事が載っていた。塾の勧誘には「夫が塾の講師です」、住宅のリフォームの案内には「一週間後に引っ越します」という具合に対応すれば双方気まずくならず断れるという。しかし、このようなウソも気の小さいものには負担のようである。ウソをついてまで断れない、ウソをつくことは相手が誰であれ悪いことだからなどと、訳の分からない言い訳を言うものもいる。

話は違うが、建築科を出たのに、建築設計でなく建築の設備の設計に回され、いやだと言えず腐ってしまった者がいた。警察官に応募したが、刑事になりたいと主張できず悶々と制服の警察官のまま腐った者もいた。気の小さいものは、主張ができないようだ。

これは自分に自信が無いためだと、私は考える。こういってもいいのだろうか、本当に正しいのか、などと自分自身が信用できないため自分の希望も表現できなくなってしまう。そのため自信のない者は言いたいことも言えず腐ってしまうことになる。

このような自信は、成功体験で培われるという説がある。数学の問題を解けたときは嬉しさとともに自信が生まれる。自分には解くことができる能力があるという自信を持てば、問題に向かったとき努力しようというポジティブな行動を執るようになり、難しい問題にも挑戦できるようになる。そして、くじけずに解けるまで頑張ることができる。成功するか失敗するかかわらないが、その原因は自分の努力に依存している。ここで、やればできるという認知を効力感というそうだ。(「自己

学習能力を育てる」波田野誼余夫 東京大学出版会 1980)

知恵の輪なども、成功した体験を数多く持っている人ほど、難しい知恵の輪に挑戦したが、長い時間考え続けることができる。高い効力感が育てられているためだと思う。

中高年の知力に関して、その水準が維持されるのか低下していくのかは、私たちににとって気になるところであるが、教育水準を保つことが、知力の維持に効果的だということである。つまり、効力感が高く維持され、あらゆる方面に自信を持ち、好奇心を抱いて生活するためだと思う。生涯学習はそのためにも必要なことだと思う。しかし、従来の学校教育のような、お膳立てのあるものを素直に受け取ればよいという学習態度は、生涯学習には向かない。自分から学ぶ自己学習能力が無ければならない。その前提になるのが、各自の効力感である。好奇心や独立達成志向も必要だと思うが、この効力感こそ中心的な概念だと、私は考える。

しかし、迷惑電話勧誘を断るためだけなら、効力感も必要ないとは思ふ。私のように、単に勇気があれば良いのだから。

## 私の

### 長野オリンピック

加納 菊千代

長野冬季オリンピックに、ボランティアとして参加しました。公正な競技と、選手の健康を守るための、ドーピング検査を補佐する役割です。ドーピング・コントロール・エスコートと呼ばれるボランティアで、競技終了後選手にドーピング・コントロール・ステーション(DCS)へ行くように通告を行い、選手をエスコートするのです。

初めて通告した選手は、アメリカの選手でした。オリンピックで自分の責任を果たさなければならないと思うと、想像していた以上のプレッシャーを感じました。口は動いているが、心はどこか別のところを漂っているようでした。「わかりました」と選手がサインしてくれたときには、涙がこぼれ落ちそうでした。

ゴールした選手は、すぐ取材陣に囲まれます。一位から三位までの選手はさらにフラワー・セレモニー(表彰式)やプレスセンターでの記者会見があります。一時間以内にDCSへ行かなければなりません。あっと言う間に過ぎてしまいます。検査手続きは、医師と看護婦が担当します。けれども、選手の体調によっては何がわかるかわかりませ



るので、エスコートはすべてが終わるまで、選手を陰ながら見守ります。ある外国の選手は、なかなかトイレに行く状態になりませんでした。エスコートの方々は、一人で待合室にいる選手の気持ちを思いやり、邪魔にならない程度に、話しかけたり、冗談を言って笑わせたりしていました。終了したのは、日も暮れ、会場に人気なくなる頃でした。スタッフ全員でその選手を見送ると、選手は一瞬驚いたようでしたが、「ありがとう」と何度も言って、うれしそうに帰っていきました。

残念に思うこともありましたが。スタッフのなかには、選手の状態を考えずに行動する人もいました。ある選手が競技を終え、休むまもなく取材に応じ、マテリアル・チェック(スキーの道具が規定に合ったものかをチェックすること)を済ませているときに、突然肩をたたき、振り向いた選手に紙を突き出したのです。その選手は、あまりに突然のことでDCSに入った途端、泣きだしてしまいました。もう二度と選手に、こんな悲しい思いをさせてはいけなかったと思いました。

スタッフは全部で20人くらいで、医療関係者を中心に、会社員、学生などさまざまな人たちでした。仕事中は真剣でしたが、終わればみんな愉快な人たちで、笑いが絶えませんでした。オリンピックのボランティアはみんな初めての経験でしたので、知恵を出し合い、協力し合い、悔いのない仕事をしようと頑張ってきました。自分のしたことは、小さなお手伝いでしたが、そのなかで役に立つことの喜びを、みんなに分かち合うことができました。このような心に残る思い出という、一生の宝物をいただき、私の長野オリンピックは無事終了しました。

## 特集: 面接授業の紹介

### 確率論

火曜日第一コース(10:00~12:15)  
担当講師:多賀保志

<講義概要>順列・組合せにもとづく確率論を、ギャンブル、遺伝、破産問題などの話を交えて、わかりやすくかつ興味ある講義・演習を行う。

<参考文献>W.フェラー「確率論とその応用」(上下)紀伊國屋書店  
馬場良和「確率論」放送大学教材

<講師紹介>多賀保志(工学博士)  
略歴:昭和26年6月~昭和47年3月 統計数理研究所室長、昭和47年4月~昭和51年3月 静岡大学工学部教授、昭和51年4月~昭和56年3月 千葉大学工学部教授、昭和51年10月~平成元年3月 横浜国立大学文理学部教授、平成2年4月~平成6年3月 文教大学国際学部教授、現在 放送大学非常勤講師

近況報告:趣味は読書・書道・テニス  
統計学を学んで実際に応用したい方々のための研究会を作りたいと思います。

## 逸脱の社会学

火曜日第一コース(12:45~15:00)  
担当講師:緑川 徹

1.担当授業の一行要約:犯罪・非行、いじめ、薬物依存、援助交際...等の<逸脱>とされる現象を社会的に分析

2.講義の概要:<逸脱>とは、集団・社会の規範に違反し、その標準からはずれたものであって、現代社会は、犯罪、非行、いじめ、薬物依存、援助交際など逸脱とされる現象に溢れています。逸脱=悪>として、これを非難したり、嘆いたりするのは簡単です。しかし、人類がルールを破るといふ逸脱の誘惑に負けたのはアダムとイヴの昔から変わらないことですし、また天才と呼ばれる人物に多くの逸脱のエピソードが語られることを思い出してみれば、逸脱者が新しい時代や社会を先取りした存在の場合もあることが分かるでしょう。つまり、逸脱とは、現代社会を鏡に映した姿であると同時に、未来を写した姿の可能性もあるのです。そこで逸脱現象を研究することは、現代社会を理解し、未来を知ることでもあり、今をそして将来をより良く生きるために「逸脱の社会学」はあるのです。

3.各回の内容目次:第1回 入門篇~逸脱&逸脱の社会学とは何か 第2回 理論篇 ~緊張理論,学習理論,統制理論 第3回 理論篇 ~ラベリング理論 第4回 事例研究篇~戦後非行史&現代社会論 第5回 総集篇~犯罪恒常説&逸脱の機能

4.受講にあたり講師から:第1回に「自己紹介文」、第2回以降は「感想

文」(枚数自由)を毎回提出して頂くことによって、受講生の質問・要望等にこたえながら、授業を進めます(これらは成績評価とは関係なし)。合否判定は出席点(3回以上)と「レポート」(2枚以上で、課題など詳細は第1回に指示)点の総合評価で行ないます。この授業は講義中心ですが、大学での勉強・研究とは基本的には「自学自習」にあり、教養学部という性格からも、講義をただ聞くだけでなく、進んで本や論文を多く読むことが必要だと考えますので、文献を精選して紹介し、受講生の学習を援助する予定。  
<開かれた知>と<愉しい知識>を目指して、時には「逸脱の社会学」をも逸脱して、笑いの絶えない授業にします。なお、精神的に若く、現代社会の動きに関心があって、ジョークの分かる人向き。

5.参考文献:毎回のレジメで<おすすめ文献解説>と<参考/使用文献>として紹介する。関連授業:特別講義(TV)「少年非行の世界」(全5回)

6.略歴・担当授業:略歴 1967年 産婦人科で生まれる。1986年 早大法学部入学、その後大学院へ。1996年 清永先生に出会い、岩永先生と池袋で酒を飲む。1997年 論文『日本型行刑論のイコノロジー』が一部で賛否両論を呼ぶ。

7.現在研究中のこと:制度上は『刑事政策学・犯罪学』専攻だが、刑罰思想史>と称して刑罰及び刑罰論をめぐり思想史ないし精神史>の研究をしている。その具体的成果としては、日本の受刑者処遇は制度的改革もないのに、何故か1980年代になってそれに対する実務家の自己評価が急速に高まったが、その謎を<日本文化論の変容>というパラダイム転換から読み解いた、法研論集(早稲田大学大学院法学研究科)83号(1997年)掲載の拙稿を御覧下さい。学際的でクリエイティブで面白いという、「めっちゃ2イケ」てる論文だと自分では思う。最近では方法論などを学ぶために美術史学、音楽史学、建築史学の本を読み漁っている。

8.近況報告:マイブームは、コンテンツエンジン理論(経営学)、アニメ「少女革命ウテナ」(不条理なシーンやパロディ的台詞にハマっているだけで、別にオタクではない)。趣味はダイエット(通販でアプフレックス買った人連絡下さい。おいしいケーキ情報も募集中)口癖は「ヴィダルはそう教えてくれました」。(以上は1997年12月現在のもので)

## 現代社会と教育

木曜日第二コース (15:00 ~ 17:45)  
担当講師：牧田 章

<講義概要>教育の現状について、変動する社会との関係から考察を始める。なかでも、とくに国際化・情報化・高齢化・少子化に関して考えたい。そして、地域社会や生涯学習社会の動向を考え、展望する中で、教育に対してどのようなことが期待されるかを考察する。なるべく、身近な資料を用いて考えていきたい。

一回目 教育の現状と変動社会  
二回目 国際化・情報化社会と教育  
三回目 高齢化・少子化社会と教育  
四回目 地域社会と教育  
五回目 学習社会と生涯学習

<受講にあたり講師から>この科目は、領域が広いので、自分が関心をもつ問題や課題と関係させて学んでほしい。例えば、少子化の問題はこれにとどまらず、高齢化や地域社会のほかの教育問題とも関係するのである。授業では、横浜や神奈川の資料などを多く用いるので、家族や身近な友人とも語り合いながら、学習を進めてほしい。これらを通して、資料の収集・解釈などにも触れていきたい。印刷教材「現代社会と教育」を準備しておくこと。

<参考文献>稲垣忠彦「戦後教育を考える」(岩波) 青少年育成研究会「国際化時代と青少年」(日本教育新聞社) ダニエル・グリーンバーグ 大沼約「超学校」(一光社)

## フランス語

(1) 初級フランス語の基礎を学ぶ  
担当講師：渡辺美紀子  
フランス語 (土曜日第一コース)  
フランス語 (土曜日第二コース)

(2) 初級文法をマスターしつつ、簡単な日常的なコミュニケーションがフランス語で出来るよう、又、相当高度なビデオ教材の理解を助け、導入となるように授業を進める。

(3) フランス語 : 1 回目 名詞の性と数、冠詞、動詞腎 re, -er 動詞を使った表現、挨拶の仕方を学ぶ。ビデオ教材スケッチ 1 への導入、2 回目 疑問文の作り方、否定文、動詞 avoir を使った表現、身分の表し方、ビデオ教材スケッチ 2 への導入、3 回目 前二回の復習。動詞 pouvoir, vouloir を使った表

現、il faut の表現、ビデオ教材スケッチ 3 への導入、4 回目 動詞 ir 動詞、aller, venir 近接未来、近接過去 ビデオ教材スケッチ 6 への導入、5 回目 疑問代名詞、疑問副詞、疑問形容詞 ビデオ教材スケッチ 7 への導入

フランス語

1 回目 直接法複合過去、前置詞+関係代名詞、比較級 ビデオ教材スケッチ 1 への導入、2 回目 直接法半過去、大過去 ビデオ教材スケッチ 3 への導入、3 回目 中性代名詞 le, y, en、命令文 ビデオ教材スケッチ 4 への導入、4 回目 直接法単純未来、直接法前未来 ビデオ教材スケッチ 6 への導入、5 回目 条件法現在、条件法過去 ビデオ教材スケッチ 7 への導入

(4) 始めてフランス語を学ぼうとする人にはビデオ教材が難し過ぎるかもしれない。しかし、くじけずに何度も繰り返し見て欲しい。面接授業もそれぞれ二回位は繰り返す積もりでのぞんだ方が良いかもしれない。そのうちにフランス語の魅力にとりつかれるでしょう。五回目の面接授業でこれまで学んだことの簡単なテストを行って及落を決める。

(5) 参考図書: 「プログレッシブ仏和辞典」(小学館)「わかるフランス語(基礎編)」、家島光一郎、霧生和夫著、三省堂

(6) 略歴: 慶応大学仏文卒 パリ大学(3) 修士卒 フランスに10年滞在 現在、青山学院大他でフランス語講師

(7) ヨーロッパの魅力は多民族からなる一つの文化共同体であるということであり、その基盤はキリスト教だと思ふ。どの町にも中心に広場があり、そこには必ず教会がある。そしてそれが単なる歴史的記念物として保存されているのではなく、人々が日常生活の精神的よりどころとして随時訪れ、使われていることに感動する。しかも石の文化なので、何百年前の建物が今も健在し、その中に入ると自分が大きな歴史の流れの中に生きている存在であることを感じさせられる。積年の諸国間の対立を克服し、ヨーロッパ統合の実現の通貨統合という最後の段階に入っているヨーロッパ、そのリーダーシップをとってきたフランス。この国を理解するには何よりもその言語の習得が必要である。たとえ片言でも、誰もが対話を求めている感じがするこの国への旅は楽しく、豊かなものになる。

(8) フランスの歴史、特にその精神史に興味がある。夏に一ヶ月フランスのパリに滞在することが習慣になっているので、その間に来る人がいれば歓迎します。パリは散歩の楽しい町、食べ物のおいしい町、そして自らが美術館のような美しい町。

## プログラミング実習

日曜型 11月 15、22 日

担当講師：御手洗 理英

(みたらい りえ)

略歴 神奈川県出身。放送大学卒。アーマツコンピュータスクールスクール長。著書「学習 B D S - C - C」(共著、工学図書)、「基礎から一太郎検定まで」(工学図書)ほか

担当授業: 情報処理入門。プログラミング実習。

放送大学では早くからネットワーク環境でのパソコン実習に力を入れ、授業の中でも電子メールの考え方やネットワークの実践的な利用法が学習できるようになっています。さらに、「生活の中で、パソコンをどのように活用していくべきなのか。」また「仕事にパソコンを利用することによる可能性」を考察し、受講者が自分なりの活用方法を見いだすことができるようになっています。

技術革新の中でパソコンや利用方法も急速に変化して行きます。つい、追い求めることにばかり目が行きがちな中で本当に大切なものを見分ける力をつけること、これが本当の教養ではないでしょうか。

意欲のある多くの方の参加をお待ちしています。

近況報告: 今年、「インターネットを利用した通信教育」について研究中です。何か良いアイデアをお持ちの方は、ぜひご意見をお聞かせ下さい。(メールアドレス: school@armat.com)

・私の家では、黒いラブラドルを飼っています。フリスビードッグにしようがんばっていますがうまくいきません。訓練所の方に言わせると、「犬が悪いのではなく、人間のフリスビーの投げ方の問題だ」ということですが…。もちろん、目標は、フリスビーの大会にでること。(仕事に追われそんな暇がどこにあるのかも思いますが)

## 学生団体・ サークルの活動

### 人間学研究会

行事予定

<例会の予定 7~10月>

・7/12(日)例会は13時~、14~16時、島内裕子助教授の講演。・8/2(日)10~16時、第12回フェスタ・ヨコハマ、内容は例年と大きく変わることはありません。この日に『せせらぎ』10号を発行します。・9/6(日)内容未定。10/11(日)内容未定。

<「歩きましょう」の予定7~10月>

・7/4~5(土~日)東海道自然遊歩道を歩く。・7/19(日)富士登山。8/5~9(水~日)北アルプス裏銀座縦走(黒部五郎岳~三俣蓮華岳~烏帽子岳)。・9月清里と八ヶ岳(赤岳)登山。・10/3~4(土~日)第7回丹後天橋立ツアー。・10月 中仙道を歩く(岐阜~赤坂~関ヶ原~醒井~高宮)。

#### 人間学研究会誌「せせらぎ」

ある時、山に、野辺に雨が降った。そしてそれぞれ個性のある水滴となり自然に求めるところに向って小川となった。その流れの中でそれぞれの水滴は共に語らう友達を見つけお互いにせせらぎの音を奏でた。すべての専攻分野、生活体験、興味の向くところを自由に発表し「せせらぎ」の声で文集を作ることにした、と聞いております。会員以外の人にも充分読んでいただける内容を目指しています。(8月2日発行 500円)

### 神奈川放友会

神奈川放友会は会員相互の親睦を図り、学習を援助する為に下記の活動をしています。

- ・学習に関する情報交換
- ・会員相互の研究発表
- ・研修旅行(大学本部セミナーハウスで図書館利用の習得等)
- ・社会探訪(歴史博物館、動植物園、美術館及び名所史跡等の見学)
- ・機関誌発行(不定期)

平成10年度新学期と共に多数の新会員を迎えることが出来、放友会の活動に活気が満ちてきました。4月の通常総会に続き5月の例会では学習に関する

情報交換が活発に行われ新会員・特に新入学の方のお役に立てたと自負しています。

7月に入ると放送授業も終りに近づき認定試験の準備が始まります。この機会に放友会に入会しませんか、連絡をお待ちしています。

・行事予定(6月~10月)・6月13~14日放友会研修旅行(大学本部)。・6月27日(土)臨時例会(大岡地区センター)。・8月2日(日)フェスタヨコハマに参加。・7月~9月は放友会の月例会はお休みですが、一学期の認定試験結果の情報交換の準備をします。・10月17日(土)レクリエーションを兼ねた社会探訪を予定。

・連絡先:吉田昭二

(Tel/Fax:045-752-2783)

### 放大神奈川合唱団

<活動報告>

珍しく青空の広がった5月21日、学習センター道路向いの、大岡地域ケア・プラザへ慰問に入りました。ここには、孤独の高令者、身障者、或いは介護を必要とされる高令者が、週一回きめられた曜日に、送迎のマイクロバスでここへいらっしゃいます。予め設定されたサービスマニューにより、お年寄り向きの体操、遊戯、歌、ゲーム、をみんなで楽しく一緒に遊びながら体を動かすのです。ボランティアや、職員、研修生が、甲斐がいしく動き回り、手を添えたり、体を抱き上げたり、用具のセットに次々と忙しく、汗を流しておられます。

私達が、仲間入りして皆さんと一緒に唄いましょうと、優しく語りかけると、嬉しそうにこちらをみつめ、歓迎して下さいました。

つい立てには、大きな字で歌詞を書いた大洋紙、みんなの手には、ピンクとブルーの歌詞カードが配られています。私達のリードで 野ばら、大きな栗の木の下で、いい声だいい声だ、すいかの名産地、称城寺の狸ばやし、かたつむり、花、ふるさと、8曲を声を合わせて唄いました。気持ちが一つに結ばれ、実に気分爽快でした。とても暖かな雰囲気と、意外な元気さに取り囲まれて、ほっと胸を撫でおろし、これでケアサービスの一助になれたと思うと嬉しくてたまりませんでした。またゲームにも加わり、お手伝いさせていただきましたが、チーム対抗で得点を競い、大声あげてハッスルし、心の底から笑いこぼし、体のご不自由ながらも、こんなに朗らかに面白おかしく振る舞えるひとときに、私たちまでが

幸せを感じ、貴重な体験になりました。御家族の方も、いろいろ御苦労が多いことと察しますが、この施設にお預けになられて本当に安心されて、家業にいそしめるのではないのでしょうか。

神奈川合唱団一同、心より皆様の御健康と幸せを願いながら引きさがりました。

### うえるかむ& 英会話サークル

海外学生交流サークル「うえるかむ」は、海外のOpen Universityなどと積極的に交流しています。平成8年にはタイのスコタイ・タマチュラートオープン・ユニバーシティ(S.T.O.U.)、平成9年には、台湾の空中大学、師範学院を訪れ、友好を深めてきました。来年はカナダのアサバスカ大学を訪問しようとして計画中です。

例会・各支部合同...毎月一回程度

東京西日暮里にて 13:00~

・神奈川学習センター...第二水曜  
第四水曜

いずれも 13:30~15:30

(NHKテキスト英会話入門、プリント  
海外旅行の情報交換)

また、神奈川では、生きた英語をと、アメリカ人女性 Nancy による英会話サークルもあります。

例会 第二水曜と第四水曜

(10:00~11:30)

プリント、フリー・トーキングなど  
うえるかむ&英会話サークルを通して、国際交流の小さな輪に参加してみませんか。

連絡先:坂本 0467-31-8036(19時以降)

星 045-844-9647

#### 神奈川学習センターだより編集部

発行者 浜口允子

編集者 五十嵐、遠藤、星、  
加藤、松本、皆川、吉田、  
山本、杉浦、坂井

Internetのホームページは、

<http://www.dango.ne.jp/ua-kanag/>

Eメールの宛て先は、

social@u-air.ac.jp

・編集部の中村さんと望月さんが交代しました。これまでのご苦勞に感謝いたします。次回は、「芸術の秋」「私の海外体験」について、特集をくむ予定です。

・8月2日(日)10時から、神奈川学習センター恒例の「フェスタ・ヨコハマ」を開催します。